

ある宣教師の記録

渡 辺 久 雄

昭和十六年（一九四一）八月二十八日、戦雲たれこめる神戸港から、日米間最後の交換船龍田丸で神戸女学院関係の米国人五名が引き揚げた。まことに暗い重苦しい記録である。「追いついて立てられるように」という言葉通り、それらの人びとは多くの思いを日本に残しながら、旅装もそこにして急遽出発せねばならなかった。身の廻り品を除くと、殆どの品物を置いて帰らねばならなかった。日米開戦の年の暗い思い出である。

今年の春、構内にある社交館（学生会館）の増築の際、地下の古い倉庫の一隅から、木箱数個につまった古い資料が見つかった。これに眼を通してみると、これらの資料が四十年前、故国への引揚げに際して、一応学院に保管を依頼して帰った宣教師の方々の持ち物であることが明らかとなった。その中でも、器物・図書類を除いた文書資料と写真類が貴重なものであった。

こうした資料を整理して様々なことを知った。その一つ、われわれが、いわゆるミッションスクール時代の史料収集に当たって、特定の宣教師を選んで、その人物に関する限り集中的方法を採用することの可否に就いて考え

せられた点である。われわれ日本人の側から眺めると、確かに自分達の学園の発展に尽くしてくれた宣教師の方々に限定して史料を求めようとするのは当然なことといえよう。しかしその立場を変えて考えた場合、米国側の宣教師団にとつては、海外伝道こそ神から命ぜられた最大使命なのであって、その中の一つに、いわゆるミッションスクール経営があるに過ぎない。更にこのミッションスクールにも宗派や立地の区別がある。従つて、例えば自分の学園が現在いかに大きく発展しているとしても、宣教師団から眺めるときは、ワン・オブ・ゼムに過ぎないのである。この敵たる事実を忘れると、ひとりよがりな年史を編集してしまふ恐れがある。わかり切つた話であるが、常に海外伝道の中の一つの出来事として、その位置付けを試みながら学園の歴史を考えねばならないと己に言い聞かせている。

勿論この話は戦前の場合を考えてのことであつて、たまたま戦前の記録が見つかったことから述べた私見で、現在の学園に迄当てはめようとしているものではない。

もう数年前のことであるが、スコットランド出身の有名な英国のアフリカ探險者・地理学者のリビングストンの文献を図書館で捜してゐて気付いたことがある。それは数冊の文献の殆どが、帰国に際して図書館に寄贈した第四代院長ソール女史のもので、各所に鉛筆でアンダーラインが引いてあつたり、感想が書いてあつたりした。その個所はリビングストンが奥地の伝道に苦勞しているページであつた。私はリビングストンをアフリカの探險者・地理学者として眺めようとして文献に当たろうとしたのであつたが、ソール女史は同時代の伝道者の一人として眺めていたのである。従つてリビングストンが著作を刊行した年に、女史はそれを購入して読んでいたのである。われわれが現次元で、その著作を読むのと全く異なり、生々とした感触がソール女史の心に伝わつたことであらう。この時以来、たとえ同一人物についての文献・史料であつても、時と場所、人の相違により、様々に読まれる必要があることを知つた。

「米国伝道会」の任命書

われわれ日本人にとって、外国からはるばる来日した伝道者や宣教師の行動や心情についての理解は必ずしも十分とは言えない。海外へ出かけてその教えを伝えたり、住民の為に奉仕した歴史上の人物が日本にはひとりもいなかったからである。従って神の召命に応じるとか、キリストの花嫁となつて異境の地に敢然と入ってゆく心情は、その仕事を異にし、働く場所が違っていても、宣教師である事において、心情は全く同じなのである。

古い倉庫で見つかった資料の半ば近くは、エディス・イー・ヒューステッド (Edith Evelyn Husted, 1892-) 女史関係のものである。日記帳・メモ帳・写真・カード類と同女史が使ったと思われる音楽関係の図書・楽譜等である。日記帳は大正時代末から昭和の

初期にかけた一〇年間程のもの、メモ帳は金銭出納と、音楽教育の際に書かれたものが中心である。写真に至っては、同女史(九〇歳のご高齢ながら米国にてご健在)の誕生から少女期のもの、オベリン大学時代のものなどをはじめ、ご家族に関するもの、教会伝道に関するもの、神戸女学院及び神戸女子神学校(現聖和大学)に関するもの、松山に関するものなど、夥しい量に及んでいる。文書資料と異なり、その分類や保存(既に何割かの写真



ヒューステッド女史

は変色している）法に独自の工夫が必要と思われる。

ヒューステッド女史に関する神戸女学院の公的記録は「一九二〇～一九二二年の三年間、高女部における英語・音楽の担当教師」とあるに過ぎない。しかしそれにも拘らず、現実には夥しい貴重な資料が、今ここに存在するのである。同じような例が他の学園にもあるのではないかと思っている。

当史料室が、今般『学院史料』と題する年報（将来は季刊を夢みている）を発刊するに至った動機の一つは、こうした貴重な資料の相互利用にある。従って、まずそのリスト作りから始め、それを公表したいと考えている。かつて来日して活躍した多くの宣教師の方々にとって、それぞれの任務は異なり、任地も亦各地であったであろう。しかし日本での伝道という使命は全く同一であり、その為に長い年月を日本に奉仕して下さったのである。

今回の創刊号は、まことにささやかな内容であるが、外国から眺めたとき、「日本は一つ」という考え方に立って、広く全国にあるキリスト教主義の学校・機関に贈ることにした。何らかのお役に立てば幸いである。